

ガウシアンプロセス回帰を用いた電力系統台風被害予測

中堂 蘭 祐貴 八野 知博
(鹿児島大学)

1 はじめに

鹿児島県奄美群島は、毎年多くの台風が接近する地域であり、電力系統設備に被害を受けやすい。迅速な復旧作業のためには、台風が接近するまでに被害量の予測を行い、予め復旧作業に必要な資材や人員を派遣しておく必要がある。本稿ではガウシアンプロセス (GP) 回帰モデル [1] に基づく電力系統台風被害予測を提案する。GP 回帰モデルに含まれるハイパーパラメータはカッコウ探索アルゴリズム (CS) [2] を用いて最適化を行う。GP 回帰モデルは予測値とその信頼性の尺度を得ることが出来、CS は設定するパラメータが少ないアルゴリズムである。

2 問題設定

台風被害予測システムの入力 \mathbf{x} は以下とする。

$$\mathbf{x} = [x_1, x_2, x_3]^T \quad (1)$$

ここで、 x_1 は台風進行経路、 x_2 は最大瞬間風速、 x_3 は台風番号である。予測システムの入出力 \mathbf{y} は電力系統被害量である。予測システムの入出力 \mathbf{x} 、 \mathbf{y} について、過去に奄美群島に接近または上陸した N 個の台風気象データと、対応する電力系統被害データ

$$\begin{aligned} \mathbf{X} &= [\mathbf{x}(1), \mathbf{x}(2), \dots, \mathbf{x}(N)]^T \\ \mathbf{x}(j) &= [x_1(j), x_2(j), x_3(j)]^T \\ \mathbf{y} &= [y(1), y(2), \dots, y(N)]^T \end{aligned} \quad (2)$$

が学習用入出力データとして入手可能であるとする。

3 GP 回帰モデルによる予測

台風気象データと電力系統被害量の関係は次式で表されると仮定する。

$$y = f(\mathbf{x}) + \varepsilon \quad (3)$$

ただし、 $f(\cdot)$ は定常で滑らかな関数、 ε は平均ゼロ、分散 σ_n^2 のガウシアンノイズとする。 N 個の入力データに対する関数値ベクトル

$$\mathbf{f} = [f(\mathbf{x}(1)), f(\mathbf{x}(2)), \dots, f(\mathbf{x}(N))]^T \quad (4)$$

を GP 回帰で表現すると次式となる。

$$\mathbf{f} \sim \mathcal{N}(\mathbf{m}(\mathbf{X}), \Sigma(\mathbf{X}, \mathbf{X})) \quad (5)$$

ここで、 $\mathbf{m}(\mathbf{X})$ は平均関数ベクトル、 $\Sigma(\mathbf{X}, \mathbf{X})$ は共分散行列を表す。本稿では、平均関数ベクトルを次のように入力の線形結合で表現する。

$$\begin{aligned} \mathbf{m}(\mathbf{X}) &= \tilde{\mathbf{X}}\boldsymbol{\theta}_m \\ \tilde{\mathbf{X}} &= [\mathbf{X}, \mathbf{e}] \quad \mathbf{e} = [1, \dots, 1]^T \end{aligned} \quad (6)$$

共分散行列 Σ の要素 Σ_{pq} に対する非定常型の共分散関数は、

$$\begin{aligned} \Sigma_{pq} &= s(\mathbf{x}(p), \mathbf{x}(q)) \\ &= \sigma_y^2 \exp\left(-\frac{\|\mathbf{x}(p) - \mathbf{x}(q)\|^2}{2\ell^2}\right) + \left(\sum_{i=1}^3 v_i^2 x_i(p)x_i(q)\right)^2 \end{aligned} \quad (7)$$

ここで (7) 式中の $\|\cdot\|$ はユークリッドノルムを表す。電力系統被害量の GP 回帰事前モデルは、 \mathbf{y} がガウシアンノイズに乱されていることを考慮すると、式 (5) より

$$\mathbf{y} \sim \mathcal{N}(\mathbf{m}(\mathbf{X}), \mathbf{K}(\mathbf{X}, \mathbf{X})) \quad (8)$$

$\mathbf{K}(\mathbf{X}, \mathbf{X}) = \Sigma(\mathbf{X}, \mathbf{X}) + \sigma_n^2 \mathbf{I}_N$ (\mathbf{I}_N : $N \times N$ 単位行列)、となる。予測用台風気象入力データ \mathbf{x}_* に対する被害出力を y_* とすると事後分布は、次式となる。

$$y_* | \mathbf{X}, \mathbf{y}, \mathbf{x}_* \sim \mathcal{N}(\hat{y}_*, \hat{\sigma}_*^2) \quad (9)$$

$$\hat{y}_* = m(\mathbf{x}_*) + \Sigma(\mathbf{x}_*, \mathbf{X})\mathbf{K}^{-1}(\mathbf{y} - \mathbf{m}(\mathbf{X})) \quad (10)$$

$$\hat{\sigma}_*^2 = s(\mathbf{x}_*, \mathbf{x}_*) - \Sigma(\mathbf{x}_*, \mathbf{X})\mathbf{K}^{-1}\Sigma(\mathbf{X}, \mathbf{x}_*) + \sigma_n^2 \quad (11)$$

\hat{y}_* は被害予測値となり、 $\hat{\sigma}_*^2$ は被害予測値の信頼性の尺度となる。

4 カッコウ探索アルゴリズム (CS)

GP 回帰モデルの平均関数と共分散関数に関する未知パラメータ $\boldsymbol{\theta}_m$ 及び $\boldsymbol{\theta}_c$ 、台風進行経路数値化におけるパラメータ $\boldsymbol{\theta}_p$ の学習は、負の対数周辺尤度 J を最小化することで行う。

$$J = \frac{1}{2} \log |\mathbf{K}| + \frac{1}{2} (\mathbf{y} - \tilde{\mathbf{X}}\boldsymbol{\theta}_m)^T \mathbf{K}^{-1} (\mathbf{y} - \tilde{\mathbf{X}}\boldsymbol{\theta}_m) + \frac{N}{2} \log(2\pi) \quad (12)$$

J の最小化は非線形最適化問題になるが、線形最適化と非線形最適化に分離することが可能である。すなわち、 $\boldsymbol{\theta}_c$ と $\boldsymbol{\theta}_p$ の候補が与えられれば、 J が最小となる $\boldsymbol{\theta}_m$ の候補は線形最小二乗法により推定できる。そこで本稿では、 $\boldsymbol{\Omega} = [\boldsymbol{\theta}_c^T, \boldsymbol{\theta}_p^T]^T$ を線形最小二乗法と CS の組み合わせにより決定し、未知パラメータベクトル $\boldsymbol{\theta}$ を決定する。

5 電力系統台風被害予測シミュレーション

1996 年から 2009 年までに奄美群島に接近した 18 個の台風を対象とし、学習用 17 個とテスト用 1 個に分けて予測器を構築し、被害予測シミュレーション実験を行った。図 1 に被害予測結果を示す。

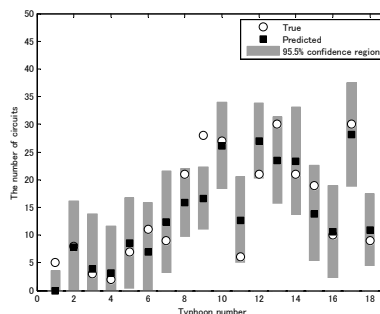


図 1 被害予測結果

参考文献

- [1] C. E. Rasmussen and C. K. I. Williams : Gaussian Processes for Machine Learning, MIT Press, 2006
- [2] Xin-She Yang, Suash Deb : Cuckoo Search via Levy Flights : Proc. of World Congress on Nature and Biologically Inspired Computing, pp.210-214, 2009